

浮島ヶ原自然公園の植物

Plants in Ukishimagahara Nature Park

中山 芳明

Yoshiaki NAKAYAMA

富士自然観察の会

Fuji society of nature observation

浮島ヶ原は、富士川の生産する土砂によって田子浦砂丘と愛鷹火山との間にできた潟湖で、その後長い年月土砂の流入があつて沼沢化した地帯であるといわれている。

現在では、ほとんどが水田化されてはいるものの、一部の場所は依然として地下水位が高く、湿地性植物の宝庫となっている。この地域は、暖帯の低湿原野の自然景観をよく保持している点で、県内はもとより全国的にみても貴重である。すなわち、休耕田や開発から取り残されたヨシ原には、マコモやウキヤガラなどの草丈の高い植物の中に、アゼスゲ、カサスゲ、オニナルコスゲ、チゴザサなどのイネ科やカヤツリグサ科の植物が優占している。これらに混じってヒキノカサ、ノウルシ、サワトラノオ、ナヨナヨワスレナグサ、ヒメナミキ、アゼオトギリなどの貴重な植物、ホソバノヨツバムグラ、シロバナサクラタデ、オギノツメ、ショウブ、ハンゲショウ、ミズタガラシ、ミゾコウジュ、ミズオトギリ、クサレダマ、ヌマトラノオなどの湿地性の植物が見られる。

かつてはミズバショウ、マルバオモダカ、アギナシ、トチカガミ、スブタ、ヒンジモ、ヒツジグサ等も見られたというが、現在では絶滅したと思われる。

次に、浮島ヶ原自然公園に現存する特に貴重な植物をあげる。

I 絶滅のおそれのある植物

< サワトラノオ > *Lysimachia leucantha* Miq. サクラソウ科 オカトラノオ属

環境省 RL:絶滅危惧 I B 類(EN) 静岡県 RDB:絶滅危惧 I B 類(EN)

原野や川岸の湿地に生える多年草。茎の先に10cm 前後の穂状の花をつけるのでトラノオ(虎の尾)の名がある。浮島ヶ原では5月中旬から6月上旬にかけて白い花が咲く。

関東地方と九州に産地が知られているが、いずれの地域でも自生地は開発によって非常に少なくなっている。浮島ヶ原におけるサワトラノオの発見は、関東と九州の分布をつなぐ意味で貴重である。

本県における分布は浮島ヶ原のみで、主として公園周辺に群生する。この自生地は昭和58年5月、富士市域自然調査の折りに、調査員であった佐藤孝敏によって発見されたもので、静岡県の植物を集大成した静岡県植物誌にも掲載されていないところから、本県初産と思われた。ところが昭和47年、当時静岡薬科大学におられた斉木保久、桶川修両氏によってその存在が報告されていた。その自生地が公園と同じであるかどうかは定かではないが、その報文の主題である後述のナヨナヨワスレナグサが多産することから、同一の場所もしくは周辺である可能性が高い。



浮島ヶ原自然公園の植物

この付近は国道1号線に沿っているため、土地開発が計られることは必至で、現に埋め立て等が進んでいる。このまま放置すれば、数年を経ずして自生地を失うことになるものと予想され、保護対策のねらいもあって自然公園の設置が計画された。

<アゼオトギリ> *Hypericum oliganthum* Franch. et Sav. オトギリソウ科 オトギリソウ属

環境省 RL:絶滅危惧 I B 類(EN) 静岡県 RDB:絶滅危惧 I B 類(EN)

湿った原野、水田の畦などに生える植物。地際から細い茎をのぼし、夏に黄色い小さい花が咲く。かつては富士山麓一帯、特に浮島ヶ原にあったが、急激に減少し、現在、浮島ヶ原で稀に見つかるような状態である。

<ヒキノカサ> *Ranunculus ternatus* Thunb. キンポウゲ科 キンポウゲ属

環境省 RL:絶滅危惧 II 類(VU) 静岡県 RDB:絶滅危惧 I B 類(EN)

水田の畦などによくみられるキツネノボタンと同じ仲間の小さな植物で、栄養のよい株でもせいぜい草丈15cm 位にしかならない。和名のヒキノカサは、蛙(ヒキ)の傘の意味で、蛙の住むような湿地に生え、茎葉や花を傘状に四方に広がる様からつけたものという。花は黄色で艶やかな花弁は大変美しく、4月から5月にかけて咲く。



分布は関東以西の本州、四国、九州の暖帯で、中国、台湾、朝鮮にもある。本県では伊豆の一部と浮島ヶ原にしかない。しかし伊豆の産地はごく限られたところで(絶滅?)、相当の広い分布域を持つ浮島ヶ原とは比較にならない。かつては田子浦にもあったという。最近発刊された各地の植物誌からみても全国的に産地は少なく、かつ生育量もわずかである。

浮島ヶ原ではまだ各所に産するが、湿地の消滅とともに絶滅する運命にある。ただ、浮島ヶ原自然公園では適切な管理がなされているので、年々わずかずつ増加している。

<ノウルシ> *Euphorbia adenochlora* C.Morren et Decne. トウダイグサ科 トウダイグサ属

環境省 RL:準絶滅危惧(NT) 静岡県 RDB:絶滅危惧 II 類(VU)

原野や川岸の湿地に生える多年草。群がって生え、群落を作る。早春に黄色い花をつける。もともと花といっても、植物形態学的には、ポインセチア同様、苞と呼ばれる器官が目立つもので、花びらや萼はない。茎や葉を切ると白い汁を出し、人によってはかぶれることもあって、野漆の名がついた。



北海道、本州、四国(愛媛)、九州(福岡)に分布し、本県では浜松市、富士宮市の記録があるが、多くは見られない。浮島ヶ原では、各地に点々と群落を作っており、県内随一の産地といってもよい。

浮島ヶ原自然公園を除いては、ここ数年来、急速に減少しており、将来が危ぶまれている。

浮島ヶ原自然公園の植物

<ヒメハッカ> *Mentha japonica* (Miq.) Makino シソ科 ハッカ属

環境省 RL:準絶滅危惧(NT) 静岡県 RDB:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

湿地に生える小形の多年草。節に短い軟毛があるだけで、全体にはほとんど毛がない。細長い地下茎をひき、茎は4稜形で、直立して分枝し、高さ20～40cm。葉は対生してごく短い柄があり、長さ1～2cm、幅3～8mm、全縁で先は鈍い。8～10月頃、淡紫色の小形の唇形花を枝先に群がってつける。花は長さ約3.5mm、筒部は萼より少し長く、先は4裂する。萼は長さ約2.5mm、5裂し無毛で腺点がある。おしべは4本で、株によってめしべより長いものと短いものがある。果実は4個の分果(1個の子房が分裂してできた果実)からなり、長さ約0.8mm。ハッカと同じ仲間、全草にハッカと同様の香りがある。



北海道から本州の近畿地方の湿地に分布する温帯の植物なので、暖帯の浮島ヶ原に存在することは珍しいことである。開発によって今日では非常に少なくなり、ごく稀にしかみられない。

なお、ハッカも浮島ヶ原には自生している。

<ミゾコウジュ> *Salvia plebeia* R. Br. シソ科 アキギリ属

環境省 RL:準絶滅危惧(NT) 静岡県 RDB:準絶滅危惧(NT)

湿地に生える越年草で、冬には大形のロゼット状の根生葉がある。茎は直立して高さ60cmほどになり、長さ5mm程度の小さい淡青紫色の花が5月頃に咲く。暖帯に広く分布するがいずれも少ない。

<オニナルコスゲ> *Carex vesicaria* L. カヤツリグサ科 スゲ属

環境省 RL:なし 静岡県 RDB:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

昭和58年、佐藤らによって発見され、杉本順一氏の同定を得て発表された本県初産のスゲ類である。ヤワラスゲによく似ているため見落とされていたものであろう。

オニナルコスゲは、氷河期に分布を広げた植物で寒冷地に多い。本県では浮島ヶ原のほかは伊豆にわずかに見られるのみであるが、氷河期に侵入したものの生き残りであろう。

自生地はサワトラノオ、ナヨナヨワスレナグサなどとほぼ同じで、従ってこれらと同じ運命にさらされている。



浮島ヶ原自然公園の植物

＜タコノアシ＞ *Penthorum chinense* Pursh ユキノシタ科 タコノアシ属

環境省 RL:準絶滅危惧 (NT) 静岡県 RDB:準絶滅危惧 (NT)

多年生の湿性植物で、茎は直立して高さ40～100cm、あまり枝分かれしない。葉は細く密生し、秋の紅葉が美しい。花序は枝先に掌状に出て先はやや巻いているが、8～9月になると開花と共に四方に長く伸張する。この花序の枝をタコの足に、花や果実を吸盤に見立ててタコノアシなる和名がつけられた。花には花弁はなく、5枚の萼と10本のおしべ1本のめしべがある。

主に河川や池沼のほとりで水が浸るほどの所に生えている。県内では各所に見られるが、産量はきわめて少ない。



＜ミツガシワ＞ *Menyanthes triforiata* L. ミツガシワ科 ミツガシワ属

環境省 RL:なし 静岡県 RDB:要注目種 (N)

沼地の浅い水中に生える多年草。カシワのような大きな3枚の小葉からこの名が付いた。早春にレースのような細かく裂けた白い花が咲く。中部以北の温帯、寒帯に広く分布するが、静岡県内では各地にごくわずかに自生するのみである。静岡県植物相調査報告書(1983年)には県内の自生地すべて絶滅?とされているが、1997年、静岡大学の湯浅保雄氏が浮島ヶ原で埋め立て寸前のミツガシワを発見、静岡植物研究会、及び、こどもの国植物育成研究会の会員によって、浮島ヶ原自然公園及びこどもの国に移植した。氷河期の遺存植物と考えられており、温帯、寒帯に分布するので環境省の絶滅危惧種には指定されていないが、浮島ヶ原のような暖帯では珍しい存在である。

(編者註:このときに浮島ヶ原自然公園に移植したものは絶えてしまったが、2010年に新たな群落が発見され、改めて浮島ヶ原自然公園に移植された。)



II その他

＜ナヨナヨワスレナグサ＞ *Myosotis laxa* Lehm. subsp. *baltica* (Sam.) Hyl. ex Nordh.

ムラサキ科 ワスレナグサ属

昭和47年、芥木、桶川らによって、本邦初産の植物として発表された。高さ 50～60cm になるが、全体に軟弱で、周囲のヨシなどにもたれかかって生育しているところから、ナヨナヨの和名が冠されたものと思う。花期は5月から6月であるが、その後も咲き残りがすこしずつみられる。径3mm 程の青色の花で、園芸用のワスレナグサを小さくしたものと思えば良い。

ムラサキ科の植物は日本にいくつか帰化しているが、芥木らはこ



浮島ヶ原自然公園の植物

の植物が本来の自然植生とみられるヨシ群落の中に、在来の野生植物であるヒメナミキ、チゴザサ、コシロネ、ノウルシなどと共同社会を構成していることから、帰化植物とは考えていない。そして同属の植物の統合整理をも考慮した上で、新種として独立させている。しかし中山らは、このナヨナヨワスレナグサが、浮島ヶ原のヨシ群落だけでなく、水田の畦や用水路付近、さらには埋め立て地にも自生していることから、日本在来の植物とすることに疑問を持っている。

本種が帰化植物であるか否かの検討はしばらくおくとしても、浮島ヶ原の生育地が今のところ我が国唯一の群生地であることは特筆に値しよう。

<ハンゲシヨウ> *Saururus chinensis* (Lour.) Baill. ドクダミ科 ハンゲシヨウ属

低湿地に生える多年草で高さ50～100cmドクダミに似た葉をつける。梅雨期になると上部につく2～3枚の葉の半分ほどがマタタビと同じように白く変わり、茎の先に花弁のない小さい淡黄色の花が咲く。白色に変わるのは虫を呼ぶためであるが、花が終わると緑色に戻る。葉の半分が白く変わることから半化粧の名が付けられた。ほかに半夏の頃に花を生じることから半夏生とする説などがある。



<シロバナサクラタデ> *Persicaria japonica* (Meisn.) Nakai ex Ohki タデ科 イヌタデ属

水湿地に生える雌雄異株の多年草。タデの仲間は花弁がなく、代わりに萼が花弁状になっているが、シロバナサクラタデは路傍などに多いイヌタデなどよりも花がやや大きく、白色で見栄えがする。ピンクの花をつけるサクラタデに似ているが別種で、やや花が小さく平開しない。浮島ヶ原には特に多く自生している。



<ミソハギ> *Lythrum anceps* (Koehne) Makino ミソハギ科 ミソハギ属

湿ったところに生える多年草で、高さ1mほどに伸びる。葉は2枚ずつ向かい合ってつくが、直上の葉は直下の葉と90度ずれてつく。そのため真上から見ると4列に並んで見える。(十字対生という)和名は溝などに生えるので溝萩、仏壇に供えるので禊萩などの説がある。盆花、精霊花の別名で知られるように仏前に供えられた。そのため庭に植えられることもある。

浮島ヶ原には茎に短毛のあるエゾミソハギが混生する。



浮島ヶ原自然公園の植物

<クサレダマ> *Lysimachia vulgaris* L. var. *davurica* (Ledeb.) R.Knuth サクラソウ科 オカトラノオ属

草丈1mにもなる多年草で、夏に円錐状に黄色い花をつけて美しい。山地で見られるように比較的乾燥したところでも生育できるので、浮島ヶ原では路傍近くにも見られる。

和名は黄色い花をマメ科の木本であるレダマ(連玉)になぞらえて草連玉と命名された。別名のイオウソウ(硫黄草)も花色による。



<アシ(ヨシ)> *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud. イネ科 ヨシ属

古事記の天孫降臨のくだりに「豊葦原千五百秋瑞穂国」とあるように、古くは豊葦原瑞穂国、豊葦瑞穂国、豊葦中国などと呼んでいた。また、葭簀に編んだり、屋根葺きの材料などに使われたりしていた。近年はそれらの需要が無くなり無用の長物と化したが、最近では水質浄化の効用や鳥類の生息環境などとして見直されつつある。

植物図鑑には和名としてアシ並びにヨシが使われ統一されていない。一般にもこの両方の名前が使われている。しかし、前述の古事記などの表記からすればアシが本来の名前であろう。アシは悪しに通ずるからヨシとなった、といわれている。

漢字表記も混乱しているが、正しくは伸び始めたアシを葭、穂が出る前の状態のものを蘆、穂が出て花の咲いたものを葦、秋になって枯れたものを芦と書くのだそうである。



<マコモ> *Zizania latifolia* (Griseb.) Turcz. ex Stapf イネ科 マコモ属

水辺に生える大形の多年草で、高さ2mほどにもなる。葉は厚くて隙間の多い組織なので、押さえると弾力が感じられる。それで古くから笠や敷物などを作る材料にされた。

和名のコモは敷物などを織ること、即ち、クム(組)から転じてコモになったという。稲作が導入されるとコモ(菰)を編むのに稲藁が使われるようになり、藁で作った菰に対して、本当の菰の意味から真菰の名が付いた。

現在でも一部ではあるが、お盆には仏壇に供える敷物を作っている。



浮島ヶ原自然公園の植物

<ショウブ> *Acorus calamus* L. ショウブ科 ショウブ属

ショウブは、古代には葉の重なりからアヤメ(文目)と呼び、花を觀賞する現在名のアヤメはハナアヤメと呼んでいた。ショウブは、後に中国から導入された菖蒲という名称が使われるようになり、ハナアヤメは単にアヤメと呼ぶようになった。ただし牧野博士は、菖蒲はセキショウのことであり、ショウブやアヤメに使うのは誤りであるといっている。

端午の節句というとショウブがでてくるが、これはショウブに邪気を祓う霊力があると考えられたことによる。江戸時代にはショウブという音が、尚武に通じる語呂の良さから武士階級で使われるようになり、次第に庶民の風習に広まっていった。漢方では根茎を菖蒲根といい健胃薬などに使われているが、副作用があるので注意したい。民間では保温、浴湯料として端午の節句に菖蒲湯をつかう。

浮島ヶ原の絶滅危惧種一覧

和名	環境省レッドリスト	静岡県版レッドデータブック	公園での自生確認
サワトラノオ	絶滅危惧ⅠB類(EN)	絶滅危惧ⅠB類(EN)	○
アゼオトギリ	絶滅危惧ⅠB類(EN)	絶滅危惧ⅠB類(EN)	
ヒキノカサ	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	絶滅危惧ⅠB類(EN)	○
ノウルシ	準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	○
ヒメハッカ	準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	○
オニナルコスゲ	なし	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	○
ヒメナミキ	なし	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	○
オオアブノメ	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	
タコノアシ	準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧(NT)	○
ミゾコウジュ	準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧(NT)	○
ミツガシワ	なし	要注目種(N)	○
ゴマノハグサ	絶滅危惧Ⅱ類(VU)	要注目種(N)	○

○オニナルコスゲ、ミツガシワ、ヒメナミキは、いずれも北地では普通に見られる植物なので、環境省のレッドリストには入っていない。

【主な参考・引用文献及び Web サイト】

北村四郎ほか	1961	原色日本植物図鑑 保育社
斉木保久・桶川修	1972	ナヨナヨワスレナグサについて 北陸の植物 20(3):61～64
中山芳明	1977	浮島ヶ原の種子植物 富士市の自然 227～236 富士市
長田武正	1980	原色日本帰化植物図鑑 保育社
佐竹義輔ほか	1982	日本の野性植物 平凡社
筒井貞雄	1983	福岡県のサクラソウ科植物予報 福岡の植物第9号 福岡植物研究会
近田文弘ほか	1984	静岡県自然環境基本調査植物相調査報告書 静岡県
杉本順一	1984	静岡県植物誌 第一法規出版
中山芳明ほか	1986	富士市域の種子植物 富士市の自然 富士市域自然調査報告書 富士市
岩槻邦男ほか	1989	我が国における保護上重要な植物種の現状 日本自然保護協会
岩槻邦男ほか	2000	日本の絶滅のおそれのある野生生物植物 I (維管束植物) 環境庁
清水矩宏ほか	2001	日本帰化植物写真図鑑 全国農村教育協会
清水建美ほか	2003	日本の帰化植物 平凡社
米倉浩司・梶田忠	2003-	「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList) http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html
中山芳明・細倉哲夫	2004	富士市域植物仮目録
杉山恵一ほか	2004	まもりたい静岡県の野生生物 植物編 静岡県環境森林部自然保護室
岩槻邦男ほか	2007	改訂版 環境省レッドリスト(修正版) 植物 I(維管束植物) 環境省

【注記】

- ・原文では「公園予定地」「仮称浮島ヶ原自然公園」と表記しているが、公園開園に合わせて、編者によって「浮島ヶ原自然公園」に訂正、または「仮称」を削除した。
- ・環境省レッドリストのランクについては、改訂版が公表されたため、それに合わせて修正した。
- ・学名については、「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList)による。

【写真撮影者】

- ・山田 高 (ヒメハッカ・タコノアシ・ミツガシワ・シロバナサクラタデ・アシ・マコモ)
- ・長谷川 望 (サワトランオ・ヒキノカサ・ノウルシ・オニナルコスゲ・ナヨナヨワスレナグサ・ハンゲショウ・ミソハギ・クサレダマ)

【編集】

富士自然観察の会